

必要であり、また牛、山羊などの家畜は葉を食害するので少なくとも植栽後1年は植栽地から離しておくべきであり、これは地域住民の協力が不可欠であり、その対応を確立する必要がある。さらに製材用材を生産するためには間伐や枝打ち等の試みが必要であり、また落枝性の優れた品種や、心腐れ病に対する抵抗性品種の育成が望まれ、これらのためには保育や育種の研究が必要であろう。

〔主要な文献〕 ・TURNBULL, J.W. (Editor) (1986). Multipurpose Australian Trees and Shrubs. Australian Centre for International Agricultural Research (ACIAR).
 ・WEINLAND, G. & Ahmad Zuhaidi YAHAYA (1989). An Annotated Bibliography on *Acacia mangium*. Research Pamphlet No. 192. FRIM.

図書紹介

◎二十年目のインドネシア：倉沢愛子（1994），277 pp., 草思社，東京，定価1,900円

著者は1970年に東京大学教養学部を卒業したあと、1972～1974年にかけてインドネシアから奨学金を受けてジャカルタの町に住んだ。その後アメリカのコーネル大学で日本占領期のインドネシア史研究に取り組み、その研究のため1980年から1981年にかけて再びこの地に滞在した。そして、1991～1993年にかけて著者は三たび、今度は貧しい留学生としてではなく、プロフェッソール・ドクトールの肩書きを持った日本大使館付の専門調査員としてジャカルタに住んだ。過去二回のインドネシア生活と、お互いに大きく変貌した今回の生活とに基づき著者の深いインドネシア学の知識や経験を駆使して、その社会観察や情勢分析が展開され、そこに暮らす日本人の行動や態度が考察される。海外の日本人社会に強固に築き上げられている序列や秩序の実態も見事に浮き彫りにされている。発展しつつあるこの国の実態、思いの外豊かなインドネシア人民族資本家達と底辺に捨てられている人達、そこに係わる日本人、長期滞在していれば何時か係わらざるを得ない問題にも、参考になるかもしれない光が当てられる。社会学者が見て考えて紹介する現代インドネシア社会についてのこの小論は、インドネシアという国や国民と係わる必要のある人達に、これまでのガイドブックとは違った情報を与え、新しい付き合い方をするための知恵を授けてくれることだろう。

(桜井尚武)